

〔論 文〕

盆栽趣味の広がり と 性格

—雑誌『自然と盆栽』記事にみる 1970年～1982年—

早川 陽

The Expansion and Character of Bonsai as a Hobby:
As Seen in the Magazine *Shizen to Bonsai* from 1970 to 1982

HAYAKAWA Yo

Abstract

This study uses magazine articles published after the war to understand the expansion and the character of bonsai as a hobby. The magazine *Shizen to Bonsai* (Nature and Bonsai), which was first published in April 1970, is divided into two periods (1970-1976 and 1977-1982), the contents of the articles are examined and the way the contents change over the years is summarized.

In the early Showa periods, a large-scale bonsai boom occurred and many people became bonsai enthusiasts. As a result, by 1945 the artistry of bonsai was well known. After a stagnant period of about 10 years after the war, the hobby of bonsai began to spread again around 1955, and the practice evolved, with increasing interest in miniaturization. *Shizen to Bonsai*, with reports on club organizations and exhibitions, and serialized articles by enthusiasts and masters, contributed to the growth and evolution of bonsai.

The development of bonsai in Japan from the Middle ages to the present was as follows: (1) miniature landscape-like objects, (2) a gardening culture, (3) Literati bonsai in the tea ceremony room, (4) “Art bonsai,” “Bonsai naturalism” (both see bonsai as art), “Natural beauty bonsai,” (5) “Kokufu bonsai” (nationalistic bonsai), (6) stagnant period, and (7) small bonsai (diversification of size). The author concludes that *Shizen to Bonsai* is deeply involved in the current popularity of small bonsai.

Key words: 1970s (1970年代), small bonsai (小品盆栽), bonsai magazine (盆栽雑誌), *Shizen to Bonsai* (『自然と盆栽』), bonsai hobby trend (盆栽趣味の流行)

1. はじめに

本稿は、拙論「昭和初期の盆栽趣味の諸相—『趣味大観』(1935)にみられる自然栽培趣味の記述から—」(早川2020: 38-62)に続けて、1970(昭和45)年4月に創刊された雑誌『自然と盆栽』を手掛かりに、1970年代の盆栽趣味の流行の背景を明らかにするものである。

「盆栽」は「大正末年頃(1925年頃)に至り、ようやく社会通念に昇華した」(岩佐1976: 1)といわれ、昭和期に入ると陳列会(展示会・展覧会¹)に耐えられる、山採り素材を養盆した大型(大品・大物)盆栽が増加、1945(昭和20)年にかけて需要の拡大と概念²の定着をみた。ところが、戦争末期の状

況と戦後の混乱による約 10 年間の停滞、すなわち大型盆栽の維持管理の困難さを要因とした、活動の中断が起こったとされる（池井 1978b: 145）。

戦後、国風盆栽展は 1947（昭和 22）年に再開、一時中断するも、1955（昭和 30）年にかけてその他の各陳列会（展示会・展覧会）も徐々に増加、再び盆栽趣味が隆興した。この時、『趣味大観』に示された 1935（昭和 10）年当時と比べ、趣味者層の世代交代も進み、さらに 1970 年代までに、盆栽の小型（豆・小物・小品）化による盆栽需要の入れかわりも起こった。この小型の盆栽は、もともと豆盆栽と呼ばれ、国風盆栽展では松平頼寿を始めとする一部愛好家が栽培していたサイズである。小型の盆栽は、戦後の新旧中間層³の趣味の広がりに合わせて、実生・挿し木・取り木・接ぎ木による生産量と供給方法の変化、栽培管理する住宅環境のスペースの問題から、結果的に一代でつくれるサイズとして好まれるようになった。そしてこの時期に、新しい愛好者を意識した盆栽雑誌が複数創刊⁴され、印刷メディアを媒体とした盆栽文化の啓蒙、同好会組織・展示会の増加、愛好家や名人による雑誌連載記事を通した価値観の創出が行われた。

このことから、1970 年代に創刊した盆栽雑誌の中で、新旧中間層への働きかけの顕著な、三友社の月刊誌『自然と盆栽』を、第 1 期（1970 年～1976 年（北村卓三発行））と第 2 期（1977 年～1982 年（畑鎮夫発行））に分け、記事の内容を参照し、戦後における盆栽趣味の広がりと性格の変化を考察する。

2. 戦後の盆栽趣味

2-1 戦後の盆栽趣味の広がり

大阪の文人趣味による煎茶席の飾りや、関東の園芸文化の素地から勃興した明治以降の盆栽は、皇族・貴族・政治家・実業家を中心に社交を通じた流行の高まりを見せた。ところが戦後、民主化による影響⁵を受け、盆栽趣味が大衆化されるようになった。明治から昭和初期にわたり、皇族・貴族・政治家・実業家の多くは盆栽価値の創出にかかわった⁶が、1935（昭和 10）年になると旦那衆への広がりを見せ、戦後は『サザエさん⁷』（1946（昭和 21）年～1974（昭和 49）年に連載）の「波平さん」（明治生まれで都市部の会社員）のような、新中間層の趣味として、どこの家にも鉢植えがある程度まで広まったとされる⁸。2021 年 1 月 9 日の朝日新聞記事「（サザエさんをさがして）盆栽「壮年男性の趣味」、団塊で断絶⁹」によると、当時の漫画に盆栽が描かれた背景には「波平さん」に限らず、「壮年男性のありふれた姿だった」ことが挙げられている¹⁰。そして次の「団塊の世代」は、ライフスタイルの変化によって新規参入者が一気に減ったとする重要な分析を示している¹¹。

盆栽のサイズは、それぞれの愛好者、時代の変化によっても違いがあるが、公益社団法人全日本小品盆栽協会の関東支部の秋雅展 Q & A¹²では、「樹高が約 20 cm 以下の盆栽のことを小品盆栽」とするのがひとつの現代の基準であるとしている。漫画に描かれる盆栽は小品から中品のサイズで、この時期に流行するサイズも小品盆栽を中心とする、豆～中品盆栽であった。

『盆栽の社会学 日本文化の構造』（世界思想社 1978）を著した池井望は、1977（昭和 52）年に設立された現代風俗研究会（桑原武夫会長）¹³ の 1978（昭和 53）年会誌に「流行研究の方法—古典理論を出発点にして—」（池井 1978a: 48-70）をまとめている。池井は、「流行」の理由を「選択」に求め、「最低限の財の生産と蓄積が必要である」こと、「財の量は一定限をこえると種類を生み出す」（池井 1978a: 51）と示す。そして、H. スペンサー、T. B. ヴェブレン、G. ジンメル、G. タルドを概観し、流行は「つくり出される多種多様の製品と、それらを選び、使用することのできる人びとの増加と分化、そ

してこの両者の関係から生まれてくる思考や感情の多様性こそ狭義の流行成立の契機」(池井 1978a: 52) であるとした。

この本の中で示された、先述の 4 者の論をまとめると以下ようになる。タルドは人間の社会生活の原理に「特別に記されたい=特記」と「承認」されようとする行為を「嫉妬」の中に持っており、競争が起こると「模倣」が生み出されるとした。スペンサーも同じ考えを元に「下位階級は模倣によって上位階級に流行交代を強制する」(池井 1978a: 53) とし、前者と後者の「距離」によって「特記」と「承認」を求めて新しい「権威」を身に付けようとするとした。さらに、ジンメルはこの両説に「両価性」があるとし、「上から下」に限られないこと、流行は止まることはなく、流動の過程として存在するとしている。そしてヴェブレンの場合、流行は「有閑階級」内での「競争」であり、「見せびらかし(衒示的)」であり、「金銭」と「時間」の消費を必要とするとした。

これらの論に示されるように、「衒示的消費」の対象となった盆栽と、「模倣」された盆栽の性格変化を、明治時代から 1970 年代の盆栽の状況と重ね合わせて考えることができる(5-2 に詳述)。戦後の新体制により、1934(昭和 9)年の憧れを残していた盆栽は、1955(昭和 30)年頃から再び興隆を見せ、1970 年代に趣味のひとつとして流行期を迎えた。

池井は先述の現代風俗研究会での報告¹⁴(1977 年 4 月 6 日)で、「自然と風俗—盆栽私見」(池井 1978b: 235)を公表、鶴見俊輔、多田道太郎、橋本峰雄の諸氏からの指摘を踏まえて、同時期に盆栽を社会学の視野から考察する『盆栽の社会学—日本文化の構造』をまとめている。

池井の特に重要な論点は、ヴェブレンの理論を援用し、「理念型としての「盆栽」の性格変化(大衆化と文化の実体)」を概念図化したこと(図 1)、また仲村祥一編『現代娯楽の構造』(文和書房 1973)の中にある、第 4 章「釣魚論—時間と娯楽」2「「待ち」の遊びとしての釣り」との共通性¹⁵を見出し、盆栽を愛好する人々の価値観の中に「時間」とのかかわりが強いことを特徴と示している。

そして、当時の盆栽史家の村田憲司の言葉として、昭和初年より太平洋戦争前までの十数年を戦前

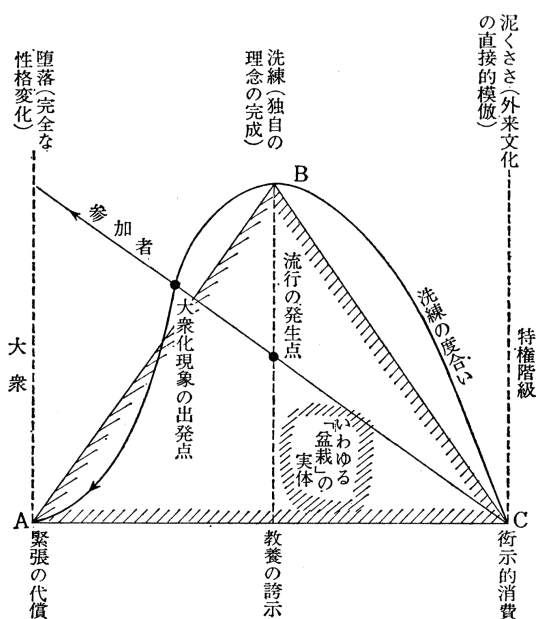


図 1 「理想型としての「盆栽」の性格変化(大衆化と文化の実体)¹⁷」(池井望『盆栽の社会学—日本文化の構造』世界思想社より)

における盆栽界の最活況期(池井 1978b: 137)とした上で、大型の盆栽の流行を 3 期に分け、「盆栽の意味は平安貴族たちの衒示的消費としての盆栽、江戸末期から明治初年にかけての教養の誇示としての盆栽、戦前昭和期の緊張の代償としてのそれと三様に変化」し、「最後に戦後の現代的な意味—純粋なホビー—に変わる」(池井 1978b: 139)とした。盆栽の理論書や、特に技法書は 1970 年代に多数発行されたが、盆栽の流行を全体で俯瞰し、概念図として示した例は池井の他に見当たらない。この考察の行われた 1978(昭和 53)年当時は、新旧中間層への盆栽趣味の広がりが顕著な時期であった。フェノロサが「美術真説」(1882(明治 15)年 5 月 14 日龍池会主催の講演)で文人画流行を批判したとされるように、戦後の流行期の盆栽ホビー化を批判的な視点で捉える様子を確認できる¹⁶。

池井は概念図（図1）の説明で、「盆栽の実体も、いわばさきの図のABCの三角形内にある。盆栽を貶価的に論ずる人はA寄りで考える人であり、芸術という人（中略）は、ごくかぎられたB点を取りあげ、外来の中国のものであると断定する人はCを問題にする人である」（池井1978b: 143）と記した。

1970年代は趣味が大衆化する時代だったとされ、ホビー、レクリエーション、余暇、娯楽、レジャー、趣味、愛好家、アマチュアを対象として着目した社会学的な研究を確認できる。

2-2 小品盆栽流行の兆し（頼寿・佐七・是好）

小品盆栽は1970年代に流行期を迎えたが、その前の1960年代に流行の兆しがある。もともと、大名の園芸文化の流れ¹⁸を汲む松平頼寿・酒井忠正らの豆盆栽・小品盆栽の公開は、1934（昭和9）年から始まった国風盆栽展である。ただし、小品の席飾りや陳列会への出品は、この当時から1950年代にかけては極少数であり、この時も主流は中型から大型盆栽であった。

『趣味の小もの盆栽 百人百樹』（光芸出版1967）¹⁹を著作した杉本佐七は、趣味者を集めた座談会を開き、盆栽にまつわるエピソードを紹介する。この会で杉本は、小盆栽・豆盆栽の流行は文政時代にあったとする。そして明治初期に盆栽小鉢を制作した旗本出身の竹本隼太、実業家であった小野義真に触れた後、「緒方雷園という人がいたんですが、その人が小盆栽、つまり木を小さくして作るのが趣味なんです。われわれは横浜にいた翠好園（藤崎万吉）——盆栽でも一番先に名人といわれた人ですが、この人の流れをくんで、教わってやっていた」（中村1968: 255）とする。さらに寸法は、「盆栽といえは一尺八寸以下、（中略）小盆栽は五寸以下、豆盆栽は三寸」と述べている。杉本は舞台の大道具制作を本職とする盆栽の名人であり、先述の「百人百樹」では「私の小もの盆栽」として、松平昭子を含む1967（昭和42）年当時の延べ104人の所有する盆栽写真をエピソードと共に紹介する。この時の盆栽の樹高は26cmの五葉松が最大で、最小は3cmのツクモヒバである。

1960年代になると俳優の中村是好（1900（明治33）年～1989（平成元）年）は盆栽家としても活躍し、1962（昭和37）年～1980（昭和55）年にかけて6冊の小品盆栽に関する著書²⁰を発行している。中村は同じ舞台が接点で交流のあった杉本佐七を小品盆栽の師と仰ぎ、著書の中で度々紹介する。

小品盆栽にかかわる「会」としての活動記録は限られているが、中村の著書には1944（昭和19）年、杉本と中村は小林憲雄とも交流があり、「ボタモチ会²¹」を戦時下で開いたとされる。会費は50銭、浅草の食堂の2階で小品盆栽を持ち寄って鑑賞会とした。そして1960年代には、中村が自宅で盆栽の仲間を集めて「中村会²²」を年に2回開催した。こういった活動は戦後継続されることになり、小物盆栽、豆盆栽の自宅での集まりとして、杉本は「寿園²³」、中村は「中村粹好園²⁴」と後に名付けている。小品盆栽の広がり、持ち寄ることによる会の楽しみの幅につながった。

その他に小品盆栽の会での活動として、杉本の著書に2つ紹介されている。ひとつは「茶のみ会（茶の実会）」（杉本1967: 164-165）で、小物盆栽会として1967（昭和42）年当時、横浜で有名になり、20名前後の会員で運営された。1931（昭和6）年に発足、1933（昭和8）年の陳列会では内閣参議の小泉又次郎、貴族院議員（のち横浜市長）の平沼亮三、頼母木桂吉（のちの東京市長）らが参加、盆栽愛好家は200名以上いたとする。戦争を経て1951（昭和26）年秋に再開、1952（昭和27）年の陳列会には1,300名以上の参観があった。以後会員は10～15名程度、会員の自宅で研究会を行い、国風盆栽展には会として2席出品している。

2つ目の「東京アマチュア小品盆栽会」(杉本1967: 165-166)は、小物盆栽好きに門戸を開き、会員は東京を中心に600名、当時毎月10~15名の新加入があったとされる。無類井政二郎、田代与志らが、杉本佐七と中村是好への呼びかけで1962(昭和37)年に発足させた。当時、小物専門の会がなかったため、すぐに約50名の会員が加わり、神代植物公園、京王百貨店、上野松坂屋での陳列会でさらに会員が増加した。会長に杉本佐七、副会長の一人は中村是好が務めた。半世紀を超えた現在でも「日本小品盆栽協会²⁵」と名称を変えて活動を続けている。

文政期より始まったとされる小物盆栽・豆盆栽は一部の元大名・華族などの愛好者が栽培を続け、1934(昭和9)年の東京府美術館における国風盆栽展での展示に繋がっている。そして杉本佐七と中村是好は、1940(昭和15)年頃に国風盆栽展に出品するようになり、小品盆栽による国風盆栽への早い段階での参加を確認できる²⁶。下町の一部や横浜での一部流行もあるが、1960年代の杉本佐七や中村是好ら趣味者の著書や活動もあって、小型の盆栽が一般に知られるようになった。1960年代の流行の兆しとして頼寿・佐七・是好らの活動は着目されるところである。

3. 雑誌『自然と盆栽』(1970年~1982年)をみる

第3章では、近代における盆栽に関する雑誌発行の変遷を確認し、その中でも1970年に創刊した雑誌『自然と盆栽』を手掛かりに小品盆栽の広がりを見ていく。ここで編集発行を行った、三友社と北村卓三について触れ、さらに雑誌の発行方針と理念をみる。それによって1970年代の小品盆栽発行の背景を確認したい。

3-1 盆栽雑誌発行の変遷

盆栽雑誌の創刊は1906(明治39)年の盆栽同好会における『盆栽雅報』とされる。同時期には、大阪園芸会『華』(1907(明治40)年)、東洋園芸会『東洋園芸界』(1908(明治41)年)も発行されている。一般誌としての雑誌販売の始めは大日本盆栽奨励会の『盆栽』で、1922(大正11)年からは叢会の小林憲雄に引き継がれ、1925(大正14)年に叢会発行となった。この時期の盆栽雑誌は大手の盆栽園が企画し、新聞社に關係する文筆家等が編集を担当している。小林も元々新聞社勤務をした経験があり、老齡で引退するまでに、518号(1966(昭和41)年)の記録的な発行があった。他にも盆栽雑誌は戦時中に複数確認できるが、長続きした形跡は見られない²⁷。『盆栽』廃刊後は、1970(昭和45)年創刊の『盆栽世界』(発行は樹石社、のちに新企画出版局、現在はエスプレス・メディア出版に変更)、また1977(昭和52)年創刊の『近代盆栽』が2021年現在まで発行を続けている。

本稿で考察をする『自然と盆栽』は、新旧中間層を対象に、1970(昭和45)年から発行され、1982(昭和57)年に廃刊となった。盆栽雑誌は全体で20誌程度があり、明治の後半から現代まで、概観して1~3誌が発刊されている状態が継続している。もともと写真を掲載することにより、都市部と地方の盆栽愛好家の情報の共有、誌上展示が発行の主旨とされてきたが、1980年代に入るとカラー印刷が増加、「盆栽情報誌」「盆栽専用のグラフ誌」なども発行の試みがある。また周辺分野の皐月、水石、山野草、自然文化、農業、庭、ガーデニング、学術雑誌、盆栽団体に所属する会員向けの会誌等の発行も含めるとさらに多くの關係雑誌がある(表1)。

表1 「盆栽専門雑誌の発行」

No.	発行（出版社）	編集人（発行人）	タイトル	発行年	概要
1	盆栽同好会 (香樹園)	香樹園村田利右衛門, 薫風園蔵石光蔵, 主 筆生島一(無待庵)	『盆栽雅報』	1906年5月～1917年	1917年10月に事務所が墨田川大洪水の被害を受け、139号で廃刊したとされる。
2	大阪園芸会 (吉助園)	松井吉助, 小倉柿花	『華』	1907年～1910年	『盆栽春秋』(2021)第575号「さいたま市盆栽美術館だより」【第4回】『華』(大阪園芸会, 明治40年創刊)②, 大宮盆栽美術館蔵によると、1910年10月に休刊の通知があり、そのまま終刊となった可能性が高い。
3	東洋園芸会 (苔香園・清大園)	木部米吉, 清水利太郎(瀨庵)発行, 主筆金井紫雲	『東洋園芸界』	1908年5月～1918年	春秋2回の大陳列会, 臨時陳列会の開催。園芸を切り口に外国に視線が向けられている。
4	大日本盆栽奨励会 (清大園) 叢会	清水利平(香雲) 加藤秀三郎 小林憲雄	『盆栽』	1921年6月～1922年3月 1922年6月～1925年9月 1925年10月～1967年10月	1922年4月号より編集発行人が小林憲雄にかわる。同年6月号より発行所も叢会になる。1923年9月の関東大震災で、10月～翌年6月まで休刊。1925年9月に奨励会を解散。1945年3月号は戦災で焼失、1946年10月号より復刊。1967年10月(第518号)で廃刊。
5	盆栽日本社	(盆栽日本社)	『盆栽日本』	1938年～不明	『盆栽の社会学』p.137
6	帝国阜月協会	(帝国阜月協会)	『阜月盆栽』	1938年～不明	1938年12月(1号), 1939年5月(2号)
7	盆栽界社	中山宏	『盆栽界』	1940年～不明	発売元は株式会社盆栽倶楽部, 東京盆栽組合
8	大日本盆栽協会	中村捨三	『自然芸術と科学』	1941年6月～不明	社団法人大日本盆栽協会会報
9	博文館	小林憲雄	『盆栽の研究』	1942年～不明	『盆栽の社会学』p.137
10	東京盆栽組合	(東京盆栽組合)	『盆栽月報』	1942年～不明	『盆栽の社会学』p.137
11	日本盆栽青年会	(日本盆栽青年会)	『盆栽研究』	1948年頃に試み	不明
12	日本盆栽協会	日本盆栽協会	『日本盆栽協会誌』 『盆栽春秋』	1965年～2021年現在	会員向け雑誌。現在, 約4000人の会員。1973年は10000人, 1977年は20000人の会員。
13	三友社	北村卓三, 畑鎮夫	『自然と盆栽』	1970年～1982年	創刊号～第150号。1980年新年号に別冊付録。
14	樹石社 新企画出版局 エスプレス・メディア出版	村田圭司 海老名芳行 坂井雅之	『盆栽世界』	1970年5月～ 1985年～ 2012年～2021年現在	創刊号～継続中
15	八坂書房	八坂安守	『植物と文化』	1971年7月～1977年10月	季刊, 第1号～第20号。植物に関する随想など。
16	近代出版	徳尾真砂弘	『近代盆栽』	1977年11月～2021年現在	創刊号～継続中
17	月刊さつき研究社	六角見孝	『盆栽と山草』	1979年	創刊号～第4号。1980年から『趣味の山野草』へ変更。
18	近代出版	徳尾真砂弘	『盆栽グラフ』	1980年～不明	1980冬(1号), 1981春(2号), 1981夏(3号), 1981秋(4号)
19	近代出版	徳尾真砂弘	『盆栽情報』	1984年9月～1985年12月	第1号～第16号。月刊化前に増刊が5号ある。
20	盆栽学会	(盆栽学会)	『盆栽学雑誌』	1988年～2007年	学会誌, 第1号～第20号
21	近代出版	(近代出版)	『山野草とミニ盆栽』	1997年1月～2018年初夏	第1号～第128号
22	銀座森前	森前誠二	『WABI 和・美』	2002年5月～2011年8月	創刊号～第15号, 通巻第16号～第18号

※社団法人日本盆栽協会(1983)『昭和の盆栽譜—国風盆栽展五十年の歩み』, 池井望(1978)『盆栽の社会学—日本文化の構造』世界思想社, 一般社団法人日本盆栽協会発行『盆栽春秋』(2020～2021)「さいたま市大宮盆栽美術館だより」570号/572号/574号/575号/577号, 及び, 筆者が確認した実際の誌面等を元にまとめた。

3-2 雑誌『自然と盆栽』と三友社・北村卓三

三友社は1958(昭和33)年に北村卓三によって設立された文芸事務所が始まりで、文芸書籍を発行していたが、1970(昭和45)年に雑誌『自然と盆栽』を創刊している。1970(昭和45)年4月～1982(昭和57)年9月までに毎月1冊、合計150号を発行した。前半の編集人及び発行人は北村自身である。社名の由来は第120号の編集後記によると「著者、読者、編集者の三者相和す、それで三友」との話があり、また友の会入会を勧める創刊初期の紹介文に「読者と執筆者・編集者の三者=三友が一体²⁸⁾」とある。北村は読者との関わりを積極的にとり入れようとした。

『自然と盆栽』の主な内容は、各号2～3本の特集記事、文芸事務所からの縁で多くの文学者の推薦文、水上勉を始めとする文筆家によって続けられた植物や自然に関する随想の連載である。また盆栽業者や愛好家の特徴的な栽培技術の紹介、盆栽関係者の記事を取り扱い、戦後に盆栽を始めた読者の興味を引くテーマを企画、雑誌の発行を通じ、多彩な記事による先駆的な試みを続けた。読者の参加を促す企画、声掛けを頻繁に行うことで、投稿記事や画像提供、園芸資材や盆栽素材の販売や頒布、植物に関する研究会を実施し、その模様を報告記事として掲載している。

北村卓三は1973年9月15日『朝日新聞』朝刊「ひと_北村卓三」で、「雨水、空気、落ち葉、ゴミを土に戻そうと提唱する」実践者として紹介されている。その経歴によると1923（大正12）年生まれ、福井県の出身で両親と別れ、苦学して中学校を卒業、1941（昭和16）年に中国に渡り、戦後富山県呉羽村村議、任期途中で上京し1958（昭和33）年²⁹文芸事務所三友社を設立した。1970（昭和45）年の『自然と盆栽』では、自然や植物を読者とともに保護することを掲げて、当時広告も取らない雑誌として、自然との共存を強く訴えた。

北村自身、植物の栽培は趣味であったようで、記事の中では自宅で「一万余鉢の樹々に囲まれ」とある。後日、『自然と盆栽』の編集後記には、練馬区石神井の社屋³⁰に「自然盆栽研究所」を設置し、こちらにも2万数千の鉢を管理するとあるので、植物栽培の実行者でもあった。

3-3 雑誌『自然と盆栽』の理念

北村が雑誌の発行・編集人を務める前半の第1期（1970（昭和45）年～1976（昭和51）年）は、雑誌が志向する理念が誌中に多く示されている。

まず、惹句としては毎号表紙左上に、「花と庭と住まいの雑誌（創刊号）」「花*庭*住いの月刊誌（第2号～第13号）」「美しい自然をつくる月刊誌（第14号～第150号）」と示している。同じく裏表紙の内側に書かれている惹句には「緑で心と暮らしを豊かにする月刊誌」「自然をたすけて自然をつくる実用誌」「美しい四季をたのしむ家庭の趣味誌」と書かれており、続けて事業の内容として「名簿の発表」「営業の案内」「講師の派遣」「投稿を歓迎」と示す。また、編集後記のスペースには、創刊号～第4号までは「創刊のことば」（第5号のみ「本誌の主旨」）として、「人間にとって大切な、自然は、失われつつあります。本誌は、皆様とともに、滅びゆく自然を、たすけ護り、更にすすんで生活の中にも、自然の美しさを、創りだして行くための、月刊誌です。」と掲載している。

次に、「月刊「自然と盆栽」の主旨」と題した文章を「第6号～第21号」と「第22号～第81号」までに変化させて、雑誌冒頭に掲載を続けている。前半は1968（昭和43）年の川端康成ノーベル文学賞記念講演『美しい日本の私³¹』の一節を引用する。川端は同雑誌の推薦者³²の一人であり、創刊号から第81号まで氏名が掲載された。後半の文からは川端の一節が省略、若干の変更があるため両文を以下に示す。

人間にとって大切な、自然は、失われつつあります。／この月刊誌は、皆様とともに、滅びゆく自然を、たすけ護り、更にすすんで、生活の中にも、自然の美しさを、創り出して行くための本です。／ノーベル文学賞・記念講演『美しい日本の私』の中で、川端康成氏も、東洋画や日本の花道、庭園を論じ「その凝縮を極めると、日本の盆栽となり、盆石となります」と結ばれております。／日本が、世界に誇ることの出来る、代表的な、これらの芸術を、各界の専門家に指導して戴きながら、同好三十年の経験を活かして、誰

もが親しみ、実行できるようにと、平易に正しく解きあかして行きたいと思います。／この喜びや楽しみを、皆々様と一緒に、一人でも多くの人々、未知の人々にも頒ち合い、ギスギスした現代の“心の灯”としたいものです。
(1970年4月(第6号)～1971年12月(第21号)まで掲載)

人間生活にとって大切な、自然は、失われつつあります。／この月刊誌は、皆様とともに「滅びゆく自然を、たすけ護り、更に進んで生活の中にも、自然の美しさを、創り出して行くため」の本です。／日本が、世界に誇る事の出来る、代表的な、美しい日本の自然から発した、藝術を、各界の専門家に指導して戴きながら、誰もが親しみ、実行できるようにと、平易に正しく解きあかして行きたいと思います。／この喜びや楽しみを、皆様と一緒に、一人でも多くの人達や、未知の人人にも頒ち合い、ギスギスした現代の“心の灯”としようではありませんか。
(1972年1月(第22号)～1976年12月(第81号)まで掲載)

第22号から第81号の「月刊「自然と盆栽」の主旨」同頁の上部には、「出来る事から実行しよう一災害を防ぐためにも一三つの提言 土に戻そう生きているから」とあり、「雨水は下水へ流さず土に戻そう／大地に滲透させて地下水にしよう」「空気は地表で塞がず土に戻そう／土中へ通わせて酸素増強にしよう」「落葉やゴミ(動植物性)は焼き捨てず土に戻そう／地に置き腐らせて天然肥料にしよう」とのスローガンが掲げられる。

そして第6号から第11号にかけては、主筆北村卓三として「はじめに」と題した連載が続く。ここで北村は発刊の主旨に触れながら各記事を依頼した著者の紹介、記事の内容についての思いを書き、雑誌の発行を進めるにあたっての基本的な方針を解説する。

「日本の優れている所は何だろう」と、都会に育ち中国に暮らし、仕事で日本中を歩き見て思った。書物や先輩に見聞きしても考えた。「世界に日本が誇れるのは一体何んだろう」と。／そして、それは日本の風土の「微妙に美しく、厳しい自然の、四季の移り変り」しか無く、この大自然から生れた、日本の知恵や伝統に育てられた“人”と“芸術”だと思い到った。／幸いに通信社を営む編集人として、文学、絵画、歴史、科学等を扱い、また子供の頃から動植物が大好きで、特に自然、盆栽、庭、花、には非常な関心を持つ立場から、本誌を出させて戴いている(中略)「日本の良さと美しさ」を、再発見して認識するためにも、歴史、芸術、技術、科学などの各方面から「日本の自然と、盆栽、庭、花」等を真に探求し、研究をして、読者一家の皆様の、すぐ役に立つ、実用と教養の、価値ある月刊誌となるように、努力を続けて行きたい。

(「はじめに」第6号, p. 21)

第12号は冒頭ではなく「おわりに」として編集後記へ掲載場所を移動させ、「公害」と「自然保護」の言葉も一般的に聞かれるようになったこと、続けて「自然をつくる」運動につなげていきたいとの抱負が強く書かれている。盆栽について北村は、「造園や生花にもつながる知識であること」「眺めて誇るものから草木を愛し人間性を回復する、自分の手でつくる盆栽にする」という考えを示す。また老人、男性の楽しみから若い人、女性も愛好するものへ拡大させることが必要であるとしている。

執筆協力者の一人で、雑誌『盆栽』を発行した小林憲雄(是空)は『自然と盆栽』創刊号に「専門誌五〇〇号連刊 五十年の研鑽³³」を寄稿し、「自然美趣を表現する“芸術”として、盆栽と鉢植とははっきり区分せねばならない」「盆栽を大衆のものに引きださねばならない」とした。さらに、第4号から第10号まで「盆栽の歴史」を連載し、第6号では『自然と盆栽』冒頭に次の期待を寄せる³⁴。

月刊「盆栽」は、遅刊することなく、五百余号、五十年間つゞけて来ましたが、私もういよいよ八十を越えた老境に入り健康もゆるさず、こういう状態で無理して雑誌を出していることは、張り切った記事も出来なくなるのではと自省しまして、昭和四十二年十月で打ち切りました。／こうして止めれば、誰れか、この盆栽の正しい道を継承した、月刊誌を出してくれる人がいる、と思っていましたが、二年たっても誰れも代ってくれる人がいませんでした。／そこで「伝統と日本の特技をこのまま捨てておくわけにはゆかない」と、忙しいなかを、北村卓三氏が引受けて下さることになりました。／氏は、仕事の関係で個人的にも、作家・画家や文化人と交流があり、その人達も、この主旨に賛同して鼓舞して下さるので、心強い限りです。／盆栽道を愛する皆様も、この道の人々も、私と同様に、この新月刊誌を盛り上げて下さるよう、くれぐれもお願いします。(盆栽研究家)

また『自然と盆栽』の創刊号では、松平頼寿から盆栽を受け継いだ妻・松平昭子の作品³⁵(写真1)である、第44回国風盆栽展の席飾り(画像にコノテガシワ・鳳尾竹・野梅・カナシデ・雪柳、画像とは別の席にモミジ・笹・紅梅・一位・石菖、合わせて10鉢)の様子が記事として紹介された。これらの小林の盆栽と小品盆栽に関する記事や松平の盆栽作品の掲載は、雑誌『盆栽』と大名文化としての「小品盆栽」の系譜を受け継ぐ内容として、理念の引継ぎを行う意図として読み取ることができる。

盆栽雑誌を振り返ると、一般誌としての発行は、小林の『盆栽』廃刊以降、1967(昭和42)年11月からは空白期であり、1970(昭和45)年4月に創刊された『自然と盆栽』、同年5月に創刊された『盆栽世界』まで、後継誌がない状態であった。盆栽愛好家からはこの時期、一般向け盆栽雑誌の発行を望む声も多く、その期待に応える形で北村は発行の準備に入ったと考えられる。つまり1921(大正10)年6月から518号を数えた雑誌『盆栽』を、引き継ぐ意思をもって『自然と盆栽』は創刊された。

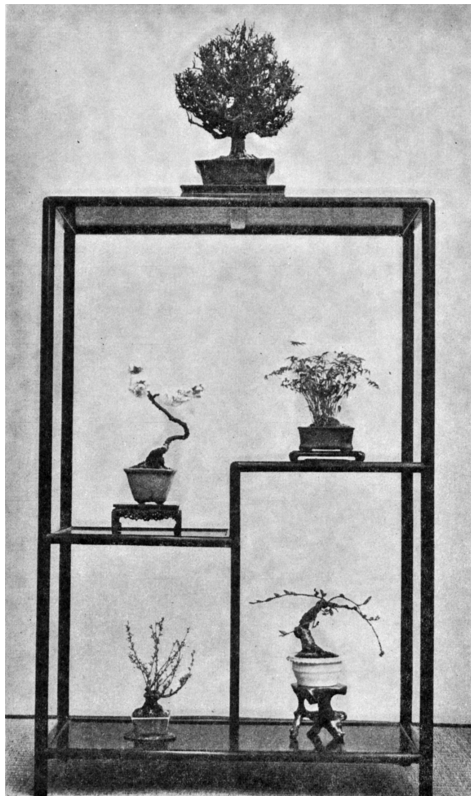


写真1 「小品盆栽 松平昭子氏」
(『自然と盆栽』創刊号1970.4.p.185より)

北村が編集発行をした『自然と盆栽』第1期は、北村の自然に対する理念が全面に出る形で編集方針に反映されていた。そして発行の後半期、畑が発行人を務める1977(昭和52)年～1982(昭和57)年の第2期は、北村が繰り返し述べた自然観を全面に出した文章は誌面から消えている。さらに、第121号からは広告の掲載も始まり、盆栽の栽培技術の紹介、写真を多用した現代の盆栽雑誌の一般的な記事、構成への変化を遂げていくように見える。

4. 記事の構成と内容の分類

第4章では、北村が『自然と盆栽』の発行人を務めた、1970(昭和45)年～1976(昭和51)年を第1期として、記事構成をまとめる(表2)。次に後任の森が発行人を務める1977(昭和52)年～1982(昭和57)年を第2期として、続けて記事構成をまとめる(表3)。ここから、読者とのかわりを中心に、戦後盆栽趣味の広がりや性格の変化を確認したい。

4-1 第1期 (1970年4月～1976年12月): 記事の構成と内容の分類

記事は大きく分けて「特集」が1～3本,「自然」「山野草」に関する「随想」が複数あり,現代の盆栽雑誌で一般的な「盆栽技術」「盆栽展示」情報などと比べて文芸的な要素,自然環境へのメッセージが強い構成になっている。『自然と盆栽』は読者アンケートを頻繁に実施し,記事の内容を検討し,読者の意見を募集して編集方針に反映させようとする様子が見える。このことから,掲載された記事の変化をみることで12年間の編集方針,1970年代の盆栽趣味者の要望を確認できると考えた。

記事としては第61号(1975年4月)になって初めて「付録『自然と盆栽』五周年記念「項目別 総目次一号～六十号」が誌面後半に綴じられる形で印刷され,記事の構成と掲載号・掲載頁を検索できるようになっている。以後,73・84・96・108・120・132・144号の約1年毎に「総目次」が掲載された。第156号でも同じ「総目次」の掲載が予想されるが,発行に至っていない。そのため第144号から最終の第150号については,筆者の集計によるもので,記事は以下の(ア)～(ホ)の項目に分類してカウントした。編集方針の変化で,(ア)～(ホ)の項目が途中で統合されるもの,新規に採用されるものもあるが,記事に合わせて分類するようにした。第2期は複数の編集人によって構成が変化するが,それまでの分類に合うように努めた。以下は記事のタイトルとその本数を数字で示した表である。連載については執筆者名をタイトルの後に()で示した。

表2 「第1期 (1970年4月～1976年12月): 記事の構成と内容の分類」

発行年月(号)	1970年 4月～12月 創刊号～9号	1971年 1月～12月 10号～21号	1972年 1月～12月 22号～33号	1973年 1月～12月 34号～45号	1974年 1月～12月 46号～57号	1975年 1月～12月 58号～69号	1976年 1月～12月 70号～81号
(ア) 特集	エゾ松1, エビネ2, カエデ・モミジ1, コケ4, サツキ・ツツジ6, サクラ7, ザクロ2, 山野草8, シダ9, 杉3, 竹1, 松5, 実物7, 置場・管理2, 繁殖1, 用具3	梅4, エゾ松5, カエデ・モミジ1, 黒松5, 五葉松7, サクラ7, 山野草6, 竹3, 姫リンゴ5, ボケ3, 松1, 繁殖13, 肥料1, 寄植4	ウメモドキ4, 柿8, 黒松5, 五葉松3, サツキ・ツツジ5, 山野草7, シャクナゲ1, 小品盆栽7, 長寿梅4, ヒメジャラ6, プナ9, 置場・管理1, 繁殖1	赤松5, 梅7, エゾ松4, 黒松5, ケヤキ3, サクラ4, 山野草3, シャクナゲ4, 小品盆栽7, 杜松5, ヒメジャラ1, 百日紅4, マユミ4, 柳3, 繁殖1	一位(オンコ)1, 梅1, カエデ・モミジ4, カラ松3, カリン2, 黒松5, サツキ・ツツジ2, サクラ1, ザクロ2, 山野草6, 杉3, ソロ4, 竹1, 杜松3, 美男カズラ2, 松1, 深山霧島1, 繁殖1, ヒメジャラ1	五葉松5, 槇柏3, プナ1, イチヨウ3, キンズ3, グミ2, 黒松3, コメツガ4, 五葉松3, サクラ2, 山野草2, ネム5, 深山霧島ツツジ5, 管理1	黒松5, 素材選び2, 植替7, アケビ・ムベ4, ザクロ3, 西洋サンザシ3, 杜松4, 錦松3, モミジ1, 石付盆栽4, 実物盆栽2, 水草2, 植替4, 管理2, 実生1
(イ) 自然界	自然破壊の元兇2, 窓辺の花4, 街の中の自然3	街の中の自然2, 森林と人間9, 北国の森の博物誌9	森林と人間12, 北国の森の博物誌12, 公害にっぽん列島7, 鎮守の杜を護ろう2, 天然記念物の木3, 写真探訪一風雪に耐えて1	森林と人間12, 北国の森の博物誌12, 公害にっぽん列島12, 鎮守の杜を護ろう12	森林と人間(西口親雄)12, 北国の森の博物誌3, 公害にっぽん列島11, 鎮守の杜を護ろう11, 写真探訪一風雪に耐えて1	森林と人間(西口親雄)12, 鎮守の杜を護ろう(菅沼孝之)12, 公害にっぽん列島6	森林と人間(西口親雄)12, 鎮守の杜を護ろう(菅沼孝之)13, 公害にっぽん列島3
(ウ) 連載読物	五十年の研鑽・盆栽の歴史(小林是空)8, わが草木記(水上勉)9, 草と木の昔(井口樹生)9, 庭のはなし9, 花ことば(春山行夫)9, いけばなの原点(北条明直)5, 花みる心(浅井敬太郎)7, 盆上の美学(北村卓三)6, 山川草木うたた荒涼(那須良輔)3, 草木談話(那須良輔)2, 芝居に現われる自然(星川喜美子)2, 私の盆栽遍歴(安部仁)2	五十年の研鑽・盆栽の歴史(小林是空)1, わが草木記3, 草と木の昔(井口樹生)12, 庭のはなし(飯田十基)3, 花ことば(春山行夫)2, 花みる心(浅井敬太郎)12, 盆上の美学(北村卓三)4, 草木談話(那須良輔)12, 芝居に現われる自然(星川喜美子)11, 私の盆栽遍歴(安部仁)5	わが草木記(水上勉)3, 草と木の昔(井口樹生)12, 花みる心(浅井敬太郎)12, 草木談話(那須良輔)12, 日本の自然の美しさ(北村卓三)1	草と木の昔(井口樹生)3, 花みる心(浅井敬太郎)12, 草木談話(那須良輔)12, 日本の自然の美しさ(北村卓三)2, 木にひそむ力(星川喜美子)7, 知っておきたい日本の習俗(錦田貞雄)1	花みる心(浅井敬太郎)2, 知っておきたい日本の習俗(錦田貞雄)3, 自然対談(那須良輔)12, 名桜と伝説(郷野不二男)7	自然対談(那須良輔)12, 名桜と伝説(郷野不二男)8, お祭り風土記(大森亮尚)9, 巨椽列伝(郷野不二男)4, 一草園雑記(野田弥三郎)4, その他2	自然対談(那須良輔)12, お祭り風土記(大森亮尚)12, 巨椽列伝(郷野不二男)8, 一草園雑記(野田弥三郎)8, 日本盆栽史私考盆栽の歴史を考証する(丸島秀夫)6

発行年月(号) 項目	1970年 4月～12月 創刊号～9号	1971年 1月～12月 10号～21号	1972年 1月～12月 22号～33号	1973年 1月～12月 34号～45号	1974年 1月～12月 46号～57号	1975年 1月～12月 58号～69号	1976年 1月～12月 70号～81号	
(エ) 山野草	山草の旅(吉川健実)6, 雑草も又楽し(山田菊雄)9, 草翁閑話(及川義夫)3, 野の味・山の味(大木恒子)6, 小鉢と庭に…作り易い山野草(太田萬里)5	雑草も又楽し(山田菊雄)3, 野の味・山の味(大木恒子)5, 小鉢と庭に…作り易い山野草(太田萬里)13, 花の山脈(林辰雄)12, 季節の草木遊び(菅野邦夫)6	小鉢と庭に…作り易い山野草(太田萬里)11, 花の山脈(林辰雄)12, 季節の草木遊び(菅野邦夫)6	小鉢と庭に…作り易い山野草(太田萬里)10, 花の山脈(林辰雄)12	小鉢と庭に…作り易い山野草(太田萬里)13, 花の山脈(林辰雄)12	小鉢と庭に…作り易い山野草(太田萬里)12, 花の山脈(林辰雄)12	小鉢と庭に…作り易い山野草(太田萬里)12, 花の山脈(林辰雄)12	
(オ) こよみ	盆栽メモ(北村卓三)9, お庭に(安藤太郎)7, いけばな手帳(山崎美津子)9, 花の歳時記3, 植物歳時記(丸山尚敏)6	盆栽メモ(北村卓三)12, お庭に(安藤太郎)2, いけばな手帳(山崎美津子)3, 植物歳時記(丸山尚敏)5	盆栽メモ(北村卓三)12, 山草メモ(吉田賢一)12	盆栽メモ(北村卓三)12, 山草メモ(吉田賢一)12	盆栽メモ(北村卓三)12, 山草メモ(吉田賢一)12	山草メモ(吉田賢一)12, 全国盆栽メモ92	山草メモ(吉田賢一)12, 全国盆栽メモ96	
(カ) 随想	32	12	32	49	27	39	40	
(キ) 訪問・ルポ	盆栽入門の記(星川喜美子)8, あなたの出番です3, その他15	盆栽入門の記(星川喜美子)8, その他8	盆栽入門の記(星川喜美子)1, あなたの出番です7, その他1	あなたの出番です1, その他3	その他2	その他5	人と花と心4	
(ク) 座談会・対談	4	4	4	1	0	1	1	
(ケ) 美術	生活の中の美(福永重樹)9, 古陶歳時記(村山武)9, くさむらの美(相沢光朗)5, 日本の風土とところ(小野礼子)2, 切手のはなし(住威久雄)5, 植物似たもの同志(佐藤広喜)9, 絵画(中井慎吾)2, その他1	生活の中の美(福永重樹)11, 古陶歳時記(村山武)12, 切手のはなし(住威久雄)4, 植物似たもの同志(佐藤広喜)7	古陶歳時記(村山武)3, 美のある暮し(村山武)6, その他1	その他1		0	—	—
(コ) 鉢	0	小鉢の面白味(忍田博三郎)8, その他2	小鉢の面白味(忍田博三郎)12	小鉢の面白味(忍田博三郎)12	小鉢の面白味(忍田博三郎)2	1	0	
(サ) 見方・味い方	8	11	2	2	12	2	0	
(シ) 盆栽技術	盆栽作家一問一答5, 体験歴盆栽論(河合誓徳)2, 伸びる草木(北村卓三)7, 珍しい草・木・石2, 小品盆栽樹種別講座(明官俊彦)2, 滅ぼされる自然の草木を盆栽に生かそう(土田貞生)2, 滅ぼされる自然の草木を盆栽に生かそう(土田貞生)2, その他5	伸びる草木(北村卓三)7, 小品盆栽樹種別講座(明官俊彦)12, 滅ぼされる自然の草木を盆栽に生かそう(土田貞生)2, あなたにもすぐに出て来る整姿(明官俊彦)10, 盆栽愛好家の記録(大野章)10, 盆栽に作って面白い樹種(山中寅文)4	伸びる草木(北村卓三)6, 小品盆栽樹種別講座(明官俊彦)12, あなたにもすぐに出て来る整姿(明官俊彦)10, 盆栽愛好家の記録(大野章)1, 盆栽に作って面白い樹種(山中寅文)6, 五葉「心覚えの記」(阿部倉吉)12	伸びる草木(北村卓三)3, 小品盆栽樹種別講座(明官俊彦)12, あなたにもすぐに出て来る整姿(明官俊彦)11, 五葉「心覚えの記」(阿部倉吉)7, 草物盆栽を作る(西山伊三郎)8, 実技の要点(大野彰夫)5, 加減談義(北村卓三)4, 自然盆栽への誘い(北村卓三)1, その他1	小品盆栽樹種別講座(明官俊彦)12, 草物盆栽を作る(西山伊三郎)9, 実技の要点(大野彰夫)7, 加減談義(北村卓三)12, 自然盆栽への誘い(北村卓三)2, 私の育てた盆栽29, 小品盆栽の卓の作り方(近藤節也)8, サツキの盆栽9, 盆栽技術講座(宮崎進平)4, 初歩の実技コーナー(吉田賢一)3, 自然と盆栽友の会研究講座の記録(福田泰人・北村卓三)3, その他2	小品盆栽樹種別講座(明官俊彦)2, 草物盆栽を作る(西山伊三郎)11, 私の育てた盆栽20, 盆栽技術講座(明官俊彦)12, 植物を探る(宮崎進平)12, 初歩の実技コーナー(吉田賢一)7, 自然と盆栽友の会研究講座の記録(福田泰人・北村卓三)3, その他4, 加減談義(北村卓三)3, 小品盆栽技術公開5, 自然樹に学ぶ盆栽樹形の研究3	草物盆栽を作る(西山伊三郎)9, 盆栽技術講座(桜井勝登)2, 植物を探る(宮崎進平)4, 小品盆栽樹種別講座(明官俊彦)9, 私の育てた盆栽9, 小品盆栽技術公開13, 小品盆栽講座整姿の研究6, その他4, 自然樹に学ぶ盆栽樹形の研究2, 実技コーナー(中島信一)3, 誰にでも出来る2	
(ス) 樹木	郷土の花木8, 日陰でも「よく育つ樹」(山中寅文)9, その他1	郷土の花木7, 日陰でも「よく育つ樹」(山中寅文)3, その他1	椿—実技と観察(長岡成男)10, 日本のバラ作り9	椿—実技と観察(長岡成男)2, 日本のバラ作り3, その他2	0	—	—	
(セ) 古典植物	0	0	0	イワヒバ4(内藤三郎), 松葉蘭(岩田謙一)4, 伊勢菊(富野耕三)4	万年青について(芦田潔)5	—	—	
(ソ) 北から南から	1	9	4	0	4	19	4	
(タ) お店紹介	7	5	0	0	0	—	—	
(チ) 三友ギャラリー	8	0	0	0	0	—	—	
(ツ) 園芸	—	—	—	—	—	—	—	

発行年月(号)	1970年 4月～12月 創刊号～9号	1971年 1月～12月 10号～21号	1972年 1月～12月 22号～33号	1973年 1月～12月 34号～45号	1974年 1月～12月 46号～57号	1975年 1月～12月 58号～69号	1976年 1月～12月 70号～81号
(テ) 話題	—	—	—	—	—	—	北から南から 14, その他 1
(ト) 三友図書館	12	4	2	1	2	3	2
(ナ) 追悼※	0	0	0	3	2	—	—
(ニ) 投稿	16	32	24	16	10	10, 懸賞作文入選 発表 7	3
(ス) 相談室	2	2	14	1	1	病害虫診断室(西 口親雄) 3	病害虫診断室(西 口親雄) 10
(ネ) 会友消息	6	3	3	0	0	—	—
(ノ) 同好会めぐり (同好会)	1	1	2	1	0	同好会訪問 8	同好会訪問 2
(ハ) 植物園・試 験所めぐり	6	0	0	0	0	—	—
(ヒ) 会報	7	6	0	3	1	—	—
(フ) 表紙	9	12	12	12	12	12	12
(ヘ) カラー写真	口絵 91	口絵 53	口絵 38	口絵 31, 生きる …かたすみで(吉 野信) 7	口絵 39, 生きる …かたすみで(吉 野信) 12, 自然盆 栽カレンダー(自 然盆栽研究所) 12	口絵 57, 生きる …かたすみで(吉 野信) 12, 自然盆 栽カレンダー(自 然盆栽研究所) 12	口絵 117, 寒樹を 楽しむ 12, 生きる …かたすみで(吉 野信) 12, 自然盆 栽カレンダー(自 然盆栽研究所) 12
(ホ) モノクロ写真	口絵等 53, 花の かたち(神野淳) 9, 展示会報告 14	口絵等 24, 花の かたち(神野淳) 12, 展示会報告 20	口絵等 24, 花のか たち(神野淳) 9, 植物の形(神野淳) 3 展示会報告 22	口絵等 26, 植物 の形(神野淳) 12 展示会報告 10	口絵等 54	81	76, 風雪に耐えて 1

※73号「項目別総目次(61号～72号)」には「美術」「樹木」「古典植物」「お店紹介」「三友ギャラリー」「追悼」「会友消息」「植物園・試験所めぐり」「会報」の項目なし。また84号「項目別総目次(73号～84号)」には「鉢」「見方・味い方」「北から南から」「同好会めぐり」の項目がなくなり、「話題」の項目が追加される。また「園芸」は85号から追加される。詳細は表3備考を参照。

4-2 第2期(1977年1月～1982年9月): 記事の構成と内容の分類

1977年1月新年特大号(第82号)では、前号までに予告なく、編集発行人が北村卓三より畑鎮夫へ変更される。本論はここから第2期とした。編集後記には「訣別の言葉」として北村による言葉が綴られている。人間は「しみじみイヤになりました」、「自然の摂理」を無視し、やたらと歴史の浅い物質文明の科学や方程式を信じて、自滅の道を進んでいる様です」とやや悲観的な思いを書く。そして盆栽は極親しい人には予告してあるとした上で、植え替え、葉刈りをせず、徒長枝の剪定のみで肥料は与え、元気であることも書いている。創業19年の三友社を辞めることと、雑誌『自然と盆栽』の成果を、「小品盆栽が盛んに³⁶⁾」なったこと、「展示会でも針金を掛けた盆栽が少なく」なったこと、他社の盆栽雑誌、単行本が本誌を真似るようになり、「自然盆栽」が広まったことと挙げる。そして第四の人生³⁷⁾が始まると締めくくる。実際に小品盆栽(豆盆栽・小物盆栽)は、小規模の同好会・愛好会を増やし、展示会のお知らせなどを各地で確認できるまでになった。『自然と盆栽』は小品盆栽の流行の中心的な立場として、盆栽趣味の交流を広げ、活動を支えるメディアとして機能したと考えられる。

引き継いだ畑鎮夫は「新任の言葉」として、三友社に入社以来17年間在籍していること、北村氏を生涯の師と仰ぎ、多くのことを学び、苦楽を共にしたこと、今後自らが事業を引き継ぐことを述べ、読者の協力を願う文章を寄せる。他の社員による編集後記には「編集、営業、事務のスタッフは、今迄と同じメンバー」であるとし、このまま業務を推し進めていく旨を述べている。

第2期の1977(昭和52)年1月(82号)から編集発行人となった畑鎮夫は、1982(昭和57)年9月(150号)まで発行人は続けるが、編集人は第128号から清水明、第145号から第150号までは佐野昌子が務める。編集の方針に着目すると編集人が変わるとに、構成が簡素化されていく様子を確認できる。

表3 「第2期 (1977年1月～1982年9月): 記事の構成と内容の分類」

発行年月(号) 項目	1977年 1月～12月 82～93号	1978年 1月～12月 94号～105号	1979年 1月～12月 106号～117号	1980年 1月～12月 118号～129号	1981年 1月～12月 130号～141号	1982年 1月～9月 142号～150号	備考
(ア) 特集	ヒノキ3, 文人盆栽5, 植替1, 接木1, 正月を飾る3, 寄植3, エゴノキ4, 五葉松5, サツキ3, 山野草8, ナシ4, ピラカンサとベニシタン5, ブドウ2, プナ1, 石付盆栽2, 置場3, 挿木5, 針金掛け3, ハツ房盆栽6, 涼味を作る2	朝鮮ソロ7, ツバキ6, 東洋ラン5, 松4, イチイ(オンコ)5, ギョウリュウ1, クチナシ5, 五葉松3, 山野草3, シダ1, 小品盆栽1, 中品盆栽1, ニシキギ5, ニレケヤキ4, フジ6, 深山海棠4, 水石6	赤松1, 梅7, エゾ松1, カリン6, 黒松7, 五葉松7, 山野草4, 杉1, ツツジ8, 杜松6, 実物2, メタセコイア1, モミジ5, 植替3, 飾り2, 水盤1, 肥料3, 寄植2	梅1, エノキ7, 黄梅4, シモツゲ1, 榎柏8, リンゴ1, 飾り1, 赤松6, ウチョウラン1, 柑橘2, 黒松2, サクラ15, 杉7, ツル物盆栽5, 唐カエデ6, 杜松2, 百日紅7, 水草4, ヤナギ5, 小品盆栽の飾り5, 芽摘み1	エゾ松9, 古典園芸植物4, 五葉松1, 山野草1, 早春の花物盆栽4, ボケ4, 小鉢1, ウメモドキ6, 黒松9, 五葉松4, サツキ5, 山野草1, 竹・笹6, 梅・米桐5, プナ9, モミジ9, 赤玉土5, 鞍馬石1, 自然樹と盆栽樹形2	梅8, ケヤキ5, 地板1, 小品盆栽5, 卓4, 素材5, クルメツツジ6, 黒松9, 樹冠7, 山野草7, 夏に咲くフジ3, 赤松9, 飾る7, 女性のための盆栽コーナー22, なぜ盆栽は飾って観るのか1, 龍眼石3	
(イ) 自然界	森林と人間(西口親雄)3, 鎮守の杜を護ろう(菅沼孝之)3, 自然保護を考える(荒垣秀雄)9, 古木名木お国自慢9	自然保護を考える(荒垣秀雄)3, 古木名木お国自慢12, 日本の自然よ何処へ(荒垣秀雄)9	古木名木お国自慢12, 日本の自然よ何処へ(荒垣秀雄)12, 溪流物語7, 自然木の樹形5	古木名木お国自慢11, 日本の自然よ何処へ(荒垣秀雄)3, 自然木の樹形12, 溪流物語5, 日本の植物・世界の植物—生態紀行(吉良竜夫)6, その他1	自然木の樹形5, 溪流物語7, 日本の植物・世界の植物生態紀行(吉良竜夫)6, 「枝枯れ」を考える旅(西口親雄)9, 自然探訪(進士道元)1	「枝枯れ」を考える旅(西口親雄)3, 自然探訪(進士道元)2, 盆栽のための気象予報6, 植物歳時記6, 自然のアルバム6, 私のふるさと自然誌6, 日本の樹6, 自然と光1, 随想1	
(ウ) 連載読物	自然対談(那須良輔)12, お祭り風土記(大森亮尚)3, 日本盆栽史私考盆栽の歴史を考証する(丸島秀夫)12	自然対談(那須良輔)12, 日本盆栽史私考盆栽の歴史を考証する(丸島秀夫)12	自然対談(那須良輔)12, 文学に描かれた植物(巖谷大四)8, 日本盆栽史私考(丸島秀夫)11	自然対談(私の野草雑記)(那須良輔)12, 文学に描かれた植物(巖谷大四)12, 日本盆栽史私考(丸島秀夫)5	自然スケッチ対談(那須良輔)11	裁匠と作風2, 鉢まんだら(村田久造)4, 小鉢作家を訪ねて5, 盆栽を支える木工芸1, 人と花と心2, 人と技術2, その他3	
(エ) 山野草	小鉢と庭に…作り易い山野草(太田萬里)12, 花の山旅(林辰雄)12, 身近な葉草に親しもう(小林正夫)8	小鉢と庭に…作り易い山野草(太田萬里)12, 花の山旅(林辰雄)12, 身近な葉草に親しもう(小林正夫)12	山草入門12 ヶ月(太田萬里)12, 花の山旅(林辰雄)5, 遠くの花近くの花6, 身近な葉草に親しもう(小林正夫)4	四季の山野草を盆に(太田萬里)12, 遠くの花近くの花12, 山草ショッピングガイド12,	四季の山野草を盆に(太田萬里)12, 遠くの花近くの花12, 山草ガイド(河合雄三)12	四季の山野草を盆に(太田萬里)3, 遠くの花近くの花3, 野の草を描く6, 山草ガイド6, 野の味・山の味5, 山草栽培の記1	
(オ) こよみ	—	—	—	—	—	—	96号「項目別総目次」から項目削除。
(カ) 随想	40	13, 自然の随想32, 特別寄稿1, 「自然と盆栽」百号に寄せて25	自然の随想39, 特別寄稿4	自然の随想39	自然の随想36	自然の随想9	
(キ) 訪問・ルポ	人と花と心12	人と花と心9	人と花と心7	人と花と心1, 聞き書きシリーズ2	2	0	
(ク) 座談会・対談	—	—	—	—	—	—	96号「項目別総目次」から項目削除。
(ケ) 美術	—	—	—	—	—	—	73号「項目別総目次」から項目削除。
(コ) 鉢	—	—	—	盆栽を楽しむ人のやきもの入門(藤田和廣)3	盆栽を楽しむ人のやきもの入門(藤田和廣)9	0	84号「項目別総目次」から項目削除。132号で項目追加。
(サ) 見方・味い方(鑑賞)	—	—	—	—	—	盆上の美6, 見方味い方4, 鑑賞盆栽鉢3, 自然盆栽展より1, その他2	84号「項目別総目次」から項目削除。145号から「鑑賞」項目追加。
(シ) 盆栽技術	草物盆栽を作る(西山伊三郎)2, 小品盆栽樹種別講座(明官俊彦)3, 改稿小品盆栽樹種別講座(明官俊彦)9, 小品盆栽技術公開1, 実技コーナー(中島信一)12, あなたにもすぐ出来る整姿10, 楽しい小品盆栽作り(明官俊彦)9, その他4	改稿小品盆栽樹種別講座(明官俊彦)7, 実技コーナー12, あなたにもすぐ出来る整姿10, 楽しい小品盆栽作り(明官俊彦)7, 小品盆栽を始める人に(小品盆栽の基礎)7, 小品盆栽専科(梶山富蔵)4, 小品盆栽専科(根守恵美子)7, 初・中級向け中品盆栽講座1, 病害虫診断室(西口親雄)9,	実技コーナー12, 小品盆栽を始める人に(小品盆栽の基礎)1, 小品盆栽専科(梶山富蔵)4, 小品盆栽専科(根守恵美子)7, 初・中級向け中品盆栽講座11, 病害虫診断室(西口親雄)12, 小品盆栽相談室(明官俊彦)12, 全国各地樹種別盆栽メモ10	実技コーナー12, 小品盆栽専科(根守恵美子)4, 病害虫診断室(西口親雄)12, 小品盆栽相談室(明官俊彦)12, 全国各地樹種別盆栽メモ2, 小品盆栽(松井春子)1, 小品盆栽を作ろう(金子昇)6, 盆栽メモ9	実技コーナー12, 小品盆栽(松井春子)1, 中品盆栽を作ろう(金子昇)3, 病害虫診断室(西口親雄)12, 小品盆栽相談室(明官俊彦)5, あなたの地方の盆栽メモ12, こんな木を作ってみませんか(明官俊彦)6, 実践初歩の松柏盆栽作り6, この盆栽はこうして作ったそして…11,	実技コーナー8, 病害虫診断室(西口親雄)9, こんな木を作ってみませんか(明官俊彦)9, この盆栽はこうして作ったそして…3, 中品盆栽の勧め(加藤重夫)3, マン・ツウ・マン教室3, 整姿時の構想はどうだったか(中島信一)2, 小さな寄せ植え(福島俊幸)3, 地方別	

発行年月(号) 項目	1977年 1月～12月 82～93号	1978年 1月～12月 94号～105号	1979年 1月～12月 106号～117号	1980年 1月～12月 118号～129号	1981年 1月～12月 130号～141号	1982年 1月～9月 142号～150号	備 考
(シ) 盆栽技術	—	小品盆栽相談室 (明官俊彦) 5	—	—	中品盆栽の勧め (加藤重夫) 3, マン・ツーン・マン教室2, 整姿時の構想はどうなったか (中島信一) 4, その他2	盆栽作業・管理メモ9, 創作盆栽のすすめ(加藤初治) 1, 盆栽は生きている6, ツバキの小品盆栽1, 小品盆栽専科4, 異種寄せ植え1	
(ス) 樹木	—	—	—	—	—	—	73号「項目別総目次」から項目削除。
(セ) 古典植物	—	—	—	—	—	—	73号「項目別総目次」から項目削除。
(ソ) 北から南から	—	—	—	—	—	—	84号「項目別総目次」から項目削除。
(タ) お店紹介	—	—	—	—	—	—	73号「項目別総目次」から項目削除。
(チ) 三友ギャラリー	—	—	—	—	—	—	73号「項目別総目次」から項目削除。
(ツ) 園芸	園芸の基礎ABC (柳宗民) 9	園芸の基礎ABC (柳宗民) 12, あなた自身で庭を美しく(安藤太郎) 8, 母と子の植物教室(勝昭一) 5	あなた自身で庭を美しく(安藤太郎) 4, 園芸の基礎ABC(柳宗民) 3, 季節の花(柳宗民) 9, 母と子の植物教室(中嶋吉男) 12	季節の花(柳宗民) 9	季節の花(柳宗民) 3, 古典園芸植物(三科徹) 11	その他1	96号「項目別総目次」から項目追加。
(テ) 話題(話題・通信)	北から南から16, 盆栽通信11	北から南から4, 盆栽通信2, 報告1, 盆栽通信4, 話題3	報告1, 盆栽通信9, 話題2	盆栽通信11, 話題5, 報告5	報告10, 盆栽通信33, 投稿13, 応募作品発表5, 北から南から3	報告4, 投稿2, 盆栽伝言板53	84号「項目別総目次」から「話題・通信」項目追加。
(ト) 三友図書館	1	—	—	—	1	1	120号「項目別総目次」から項目削除。144号から項目追加。
(ナ) 追悼	—	—	—	—	—	—	73号「項目別総目次」から項目削除。
(ニ) 投稿	15	10, 私の育てた盆栽2	13	16, 懸賞文入選作発表2	6, 懸賞文入選作発表3	0	
(ヌ) 相談室	病虫害診断室(西口親雄) 12	病虫害診断室(西口親雄) 3	—	—	—	—	132号「項目別総目次」から項目削除。
(ネ) 会友消息	—	—	—	—	—	—	73号「項目別総目次」から項目削除。
(ノ) 同好会めぐり(同好会)	—	—	—	—	同好会レポート4	同好会レポート1	84号「項目別総目次」から項目削除。144号から「同好会」項目追加。
(ハ) 植物園・試験所めぐり	—	—	—	—	—	—	73号「項目別総目次」から項目削除。
(ヒ) 会報	—	—	—	—	—	—	73号「項目別総目次」から項目削除。
(フ) 表紙	12	12	12	12	12	9	
(ヘ) カラー写真	口絵135, 生きる…かたすみで(吉野信) 12, 自然盆栽カレンダー(自然盆栽研究所) 3	口絵56, 生きる…かたすみで海外編(吉野信) 12, 盆栽鑑賞・盆栽展・特集関連写真43	生きる…かたすみで海外編(吉野信) 12, 自然の中の盆栽樹10, 盆栽鑑賞・盆栽展・特集関連写真53	今月の飾り(山田登美男) 12, 四季の山野草を盆に(太田萬里) 12, 自然のアンクル(吉田信) 12, 自然の中の盆栽樹9, 盆栽鑑賞・盆栽展・特集関連写真53	盆上の美2, 四季の山野草を盆に(太田萬里) 3, 自然のアンクル(吉田信) 12, 自然の中の盆栽樹1, 盆栽鑑賞・盆栽展・特集関連写真49, 季節の山野草を盆に(太田萬里) 10, 盆栽を生活の中へ(加藤重夫) 3	季節の山野草を盆に(太田萬里) 3, 自然のアンクル(吉田信) 3, 盆栽を生活の中へ(加藤重夫) 3, 小さな寄せ植え(福島俊幸) 3, 特集関連写真7, 盆栽鑑賞・盆栽展17, 特別観賞第56回国風盆栽展8, 各地盆栽展46	
(ホ) モノクロ写真	盆栽展69	盆栽展26, 全国各地盆栽展50, 特集関連写真7	全国各地盆栽展74, 特集関連写真3	盆栽鑑賞・盆栽展・特集関連写真24, 特集関連写真7, 全国各地盆栽展55	全国各地盆栽展123, その他1	全国各地盆栽展23, 各地盆栽展20	

※84号「項目別総目次(73号～84号)」, 96号「項目別総目次(85号～96号)」, 120号「項目別総目次(97号～120号)」, 132号「項目別総目次(121号～132号)」, 144号「項目別総目次(133号～144号)」参照。

4-3 記事の全体比較

次に4-1と4-2でまとめた「記事の構成と内容の分類」について、記事数を比較してみたい(表4)。創刊した1970年と廃刊した1982年はどちらも9冊の発行となっており、その他は各年12冊の発行である。記事の中で年を平均して毎月3本以上の連載があると確認できるものは太字で表した。

表4 『『自然と盆栽』の(ア)~(ホ)記事の比率』

1期/2期	1期	1期	1期	1期	1期	1期	1期	2期	2期	2期	2期	2期	2期	合計 記事数 (各テーマ)	比率 %
号数	1-9	10-21	22-33	34-45	46-57	58-69	70-81	82-93	94-105	106-117	118-129	130-141	142-150		
発行人	北村	北村	北村	北村	北村	北村	北村	畑	畑	畑	畑	畑	畑		
編集人	北村	北村	北村	北村	北村	北村	北村	畑	畑	畑	畑 清水	清水	清水 佐野		
発行年	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82		
発行冊数	9	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	9		
(ア) 特集	62	65	61	60	44	42	47	69	67	67	91	86	102	863	12.42
(イ) 自然界	9	20	37	48	38	30	28	24	24	36	38	28	37	397	5.71
(ウ) 連載読物	71	65	40	37	24	39	46	24	24	31	29	11	19	460	6.62
(エ) 山野草	29	39	29	22	25	24	24	32	36	27	36	36	24	383	5.51
(オ) こよみ	34	22	24	24	24	104	108	—	—	—	—	—	—	340	4.89
(カ) 随想	32	12	32	49	27	39	40	40	71	43	39	36	9	469	6.75
(キ) 訪問・ルポ	26	16	9	4	2	5	4	12	9	7	3	2	—	99	1.42
(ク) 座談会・対談	4	4	4	1	0	1	1	—	—	—	—	—	—	15	0.22
(ケ) 美術	42	34	10	1	0	—	—	—	—	—	—	—	—	87	1.25
(コ) 鉢	0	10	12	12	2	1	0	—	—	—	3	9	—	49	0.70
(サ) 見方・味方	8	11	2	2	12	2	0	—	—	—	—	—	16	53	0.76
(シ) 盆栽技術	25	45	47	52	108	82	63	50	62	69	57	81	39	780	11.22
(ス) 樹木	18	11	19	7	0	—	—	—	—	—	—	—	—	55	0.79
(セ) 古典植物	0	0	0	12	5	—	—	—	—	—	—	—	—	17	0.24
(ソ) 北から南から	1	9	4	0	4	19	4	—	—	—	—	—	—	41	0.59
(タ) お店紹介	7	5	0	0	0	—	—	—	—	—	—	—	—	12	0.17
(チ) 三友ギャラリー	8	0	0	0	0	—	—	—	—	—	—	—	—	8	0.12
(ツ) 園芸	—	—	—	—	—	—	—	9	25	28	10	14	1	87	1.25
(テ) 話題(話題・通信)	—	—	—	—	—	—	15	27	14	12	21	64	59	212	3.05
(ト) 三友図書館	12	4	2	1	2	3	2	1	—	—	—	1	1	29	0.42
(ナ) 追悼	0	0	0	3	2	—	—	—	—	—	—	—	—	5	0.07
(ニ) 投稿	16	32	24	16	10	17	3	15	11	13	18	9	—	184	2.65
(ヌ) 相談室	2	2	14	1	1	3	10	12	3	—	—	—	—	48	0.69
(ネ) 会友消息	6	3	3	0	0	—	—	—	—	—	—	—	—	12	0.17
(ノ) 同好会めぐり (同好会)	1	1	2	1	0	8	2	—	—	—	—	4	1	20	0.29
(ハ) 植物園・試験所 めぐり	6	0	0	0	0	—	—	—	—	—	—	—	—	6	0.09
(ヒ) 会報	7	6	0	3	1	—	—	—	—	—	—	—	—	17	0.24
(フ) 表紙	9	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	9	150	2.16
(ヘ) カラー写真	91	53	38	38	63	81	153	150	55	75	98	80	146	1121	16.13
(ホ) モノクロ写真	76	56	58	48	54	81	77	69	83	77	86	124	43	932	13.41
合計記事数(各年)	602	537	483	454	460	593	639	546	496	497	541	597	506	6951	100.00

表2, 表3の記事数を表右・下に合計し, 右に比率を出したもの。

全体の記事の内容としては（ア）「特集」、（シ）「盆栽技術」、（ヘ）「カラー写真」、（ホ）「モノクロ写真」の特集に、より重点が置かれている。また読者が参加する各企画は、掲載数は限られるものの、かかわる参加者や参加団体の数の多さ、個人の情報を積極的に公開することで、読者同士のかかわりをつくる機能が伝わる。次に（ヘ）（ホ）「写真」は展覧会の報告が多く、各趣味団体への取材を反映させたものとして捉えることができる。そして『自然と盆栽』の特徴ともいえる「自然界」「連載読物」「山野草」「こよみ」「随想」などの読ませる記事は、全体的に数や比重も多く、記事コンセプトにかかわる重要な位置に置かれていた。12年間の記事数は7,000弱であり、毎月46本程度の記事から雑誌が編集されていた。

第1期・第2期から記事の内容を比較すると、（ウ）「連載読物」は縮小、（シ）「盆栽技術」や読者との交流にかかわる（ソ）～（ヒ）、（テ）「話題（話題・通信）」記事は、読者の要望に合わせる形で徐々に大きい比重となっている。第1期は文芸・自然や環境に対する北村の理念を反映させる記事が多く、第2期は栽培技術への情報提供と人々の交流に関心の高まりがある。

4-4 雑誌『自然と盆栽』記事の考察

1970年代は小品盆栽同好会の結成が増加するが、第1期のはじめは、同時代の既にある会の規約や活動の参考情報を掲載し、新たに会を始めようとする趣味家の導入を促している。同好会組織ができてからは運営方針・規約の共有、年間イベントの紹介、展示会の開催情報、その他の活動報告などを共有する雑誌メディアとして影響を与えた。また『自然と盆栽』そのものが、「友の会」を結成し、「盆栽講習研究会（盆栽研究会）」を毎月実施している。会員数は、第2号編集後記に「（創刊号の出ないうちから）入会のお申込みが千人を突破」、第74号に「2万人近く」とある。友の会会員による研究会の報告、投稿記事、提供された写真の掲載も多い。また会員へ手に入りにくい種や苗の頒布を行い、土・土入れ器・鉢・篩・手入れ道具一式の販売を実施している。読者アンケート・投書等により、人気の記事を確認し、読者の声を葉書・手紙の形で頻繁に受け付けていた。第58号には「自然と盆栽創刊五周年記念懸賞募集要項」として「懸賞作文」「標語」募集などの企画、一方で、第59号には「友の会滞納者へ入金をお願い」として滞納者への連絡を促している。

1970（昭和45）年に同じく創刊し現在も発行が続く『盆栽世界』では、「友の会」などの読者と積極的にかかわる運営を行わず、既にある盆栽会・協会・組合など関係者に協力を仰ぐ交流に努めている。また読物としての随想、文学的要素は少なく、大型盆栽を含んだ“盆栽”そのものの記事に誌面を集中させている。広告の掲載も多く、雑誌のサイズも創刊当初からB5サイズを採用し、文字も画像も大きい。『自然と盆栽』が1982年4月（145号）から最終の第150号にかけて、冊子のサイズをA5からB5に大きくしたのは後追いの形になり、時期を逸したと考えられる。

1970年代は、中型から大型の盆栽は盆栽園が趣味者の盆栽を預かり、管理をする様子が多くみられる。一方で、豆盆栽や小品盆栽は、実際の栽培の工夫を通じた愛好者による交流がある。そして新しい栽培方法を開発した名人による雑誌連載記事を通じた価値観の創出があった。1960年代に杉本佐七の著書にも登場した明官俊彦は会社員であったが、数千鉢の小品盆栽を自宅屋上で栽培し、樹種ごとの栽培方法を『自然と盆栽』に連載した。三友社からは『小品盆栽の育て方I, II, III』と3冊の単行本として発行され、後年は相模湖湖畔に「明官小品盆栽研究所³⁸」を開設し、愛好者を集めた。このように、人気のあった連載は、阿部倉吉（1975）『図解 盆栽樹形の作り方 五葉松盆栽の整姿・

整形』、忍田博三郎（1976）『日本の小鉢と陶工―盆栽小鉢の面白味』などがあり、約 20 冊（付録参照）が単行本化され、三友社は誌面に広告を掲載しながら長く販売を続けた。

雑誌・書籍の購読層は、記事の内容から新旧中間層であり、戦前までの大型盆栽の愛好者と多くは一致しない。戦後の盆栽流行は、豆～中品盆栽、特に小品盆栽で発生している。このことは、盆栽園を媒介とした上流階級のつながりが強かった大型盆栽趣味から、雑誌を媒体とした小型盆栽の栽培趣味による社会人のつながりへと変化しており、違う質の流行が起きていたと考えることができる。

雑誌『自然と盆栽』は 1982 年 9 月（150 号）を以って廃刊となる。その後は『盆栽世界』（1970 年創刊）が小型の盆栽を、『近代盆栽』（1977 年創刊）が大型の盆栽を扱い、2021 年現在まで継続する。

5. 盆栽趣味の広がり性格

5-1 小品盆栽を含む「盆栽」の性格変化

第 4 章を踏まえて、1970 年代の小品盆栽の流行をまとめると、雑誌『自然と盆栽』を媒体とした広がりが確認できた。1934（昭和 9）年の「国風盆栽」による美術館への展示や、1935（昭和 10）年の『趣味大観』当時の栽培趣味と比べ、盆栽のサイズは小型化し、各地で小規模の展示会が開かれる状況へ変化した。

池井が示した図 1「理念型としての「盆栽」の性格変化（大衆化と文化の実体）」は、平安時代から『盆栽の社会学』の発行された 1978（昭和 53）年当時までの盆栽の流れを俯瞰した概念図であり、「江戸末期から明治初年にかけての教養の誇示としての盆栽」を「いわゆる盆栽の実体」として示したが、今日の盆栽の状況と変化が起きている。

改めて、全体として盆栽の流行は、①盆景的なもの（最先端文化）→②園芸文化（蛸作り、樹藝、大名文化）→③煎茶席の文人盆栽（中国風教養主義）→④美術盆栽、自然主義盆栽、自然美盆栽（盆栽の美術化）→⑤国風盆栽（国家主義的）→⑥停滞期→⑦小品盆栽（盆栽サイズの多様化）と遷移したと考えられる。

ここで、図 1 の「いわゆる「盆栽」の実体」は時期を限定して、狭い範囲の「国風盆栽」にあたるものとして考えてみたい。池井が考察した 1978（昭和 53）年の「小品盆栽」流行は、単に盆栽が小型化し、ホビー化したのではなく、「小品盆栽」そのものの流行が「大型盆栽」とは異なる形でボリュームになったものではないか。つまり、「盆栽のサイズ」「需要層の変化」「出版社のかかわり」「組織の成り立ち」は大型盆栽とは異なるものであり、ある種の「新しい盆栽」として捉えることができる。このことから、概念図としても図 2 に示したように、「新たな山」になると考えた。

5-2 盆栽趣味の広がり性格

池井の概念図（図 1）を基盤にしながら考察したことを追記すると、図 2 の最初の山の半分が、明治から戦前期に起きた盆栽の変化（前節③～⑤）である。つまり平安時代の盆景ではなく、岩佐の指摘した明治 20 年頃に発生した煎茶席での文人盆栽飾りを基軸とすると、C を大型盆栽の変化、B を 1934（昭和 9）年の国風盆栽の完成、その間には、美術盆栽、自然主義盆栽、自然美盆栽が入り、B の後、約 10 年間の停滞を置く。大型の盆栽はその後も一定の支持は継続されるが、現在の国内需要は衰退期に入ったといわれる。そして輸出品としての価値や、文化のプロモーション、インバウンド効果、流行期の創作の維持管理、美術館の展示品としての役割に変化しつつある。

その一方で、小品盆栽を㊦の時点（正確には文政期の園芸文化）から始まった新たな盆栽の発生だと

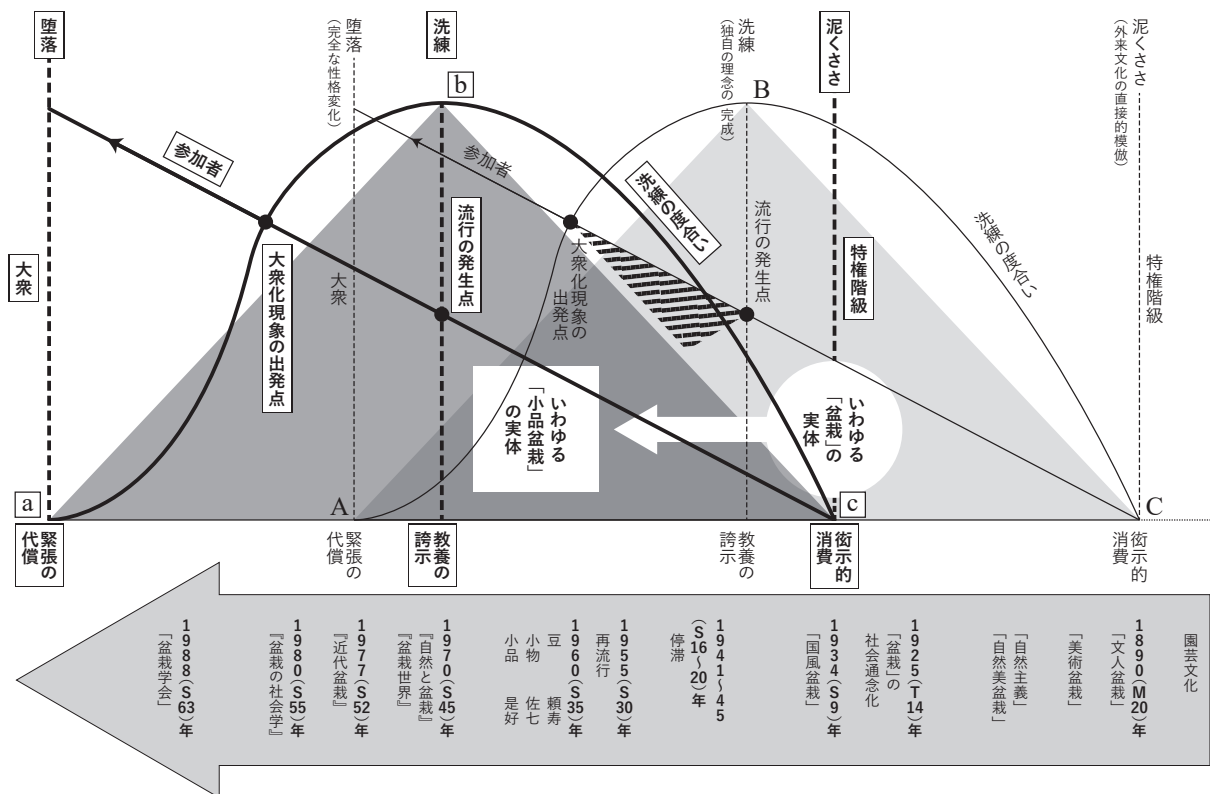


図2 「理念型としての「小品盆栽」の性格変化」

すると、広く展示公開された1934（昭和9）年から「新しい山」のボリュームになる。『趣味大観』の発行された1935（昭和10）年を経て、1960年代の「小品盆栽流行の兆し」で触れた、徳川頼寿（酒井忠正）、杉本佐七、中村是好らによる豆盆栽・小物盆栽・小品盆栽の価値観継承があり、明官俊彦らの価値の創作へ向かっている。この小さい自然への愛着、新しい趣味のムーブメントが、新たなB（b）として、1970年代の『自然と盆栽』に繋がった。各企画記事を通して、新旧中間層の趣味への参加が促され、「小品盆栽」が新しい盆栽の流行として立ち上がったと考えられる。つまり『自然と盆栽』の発行された1970年から1982年が、小品盆栽の流行期であったこと（図2）を確認できる。

池井は俯瞰的に、「盆栽はその一つの性格であるミニチュア性によって時代の心情の忠実な容器の役を果たすかわりに変化もはなはだしい」、そして「戦後には完全に植木のホビーに変わってしまうのである」、あるいは、「植物に対する率直な共感とミニチュアに対する技術的好奇心だけが戦後の盆栽を支えている」（池井1978b: 148）として、大型盆栽がミニチュア化して技術的なホビーに変わったと書いた。ある意味、正しい指摘であるが、ここを新たな流行であったと考えると図2のような2つ目の山になる。

ここまで示したように、大型盆栽が上流階級で流行した山と、戦後の小品盆栽が新旧中間層で流行した山は、実は別のものである。盆栽を観察する際に、大型を趣味とする人々と小型を趣味とする人々の間に、交流の少なさを感じていたが、盆栽の成り立ちの違いから来ている違和感だと理解できる。盆栽は大衆化されると同時に同好会の組織化や展覧会の発生、小品盆栽専門業者の開園、名人も増え、盆栽のサイズのバリエーションが多様化した。この盆栽の多様化や広がりには雑誌を媒体とした新たな交流が大きく影響したと考えられる。

註

- 1 小林憲雄によると、1928（昭和3）年には日比谷公園広場での展示があり、盆栽と鉢植えの違いを示した冊子（売価10銭）が20万部売れたとする。1934（昭和9）年3月の第一回国風盆栽展覧会を経て、独立した公開盆栽展の最初は1927（昭和2）年10月の『盆栽』誌主催、朝日新聞大講堂を会場にした「全国代表名木盆栽展覧会」である。明治のはじめ頃からの展覧会までは料亭などで煎茶席の飾りとして工夫されてきた（『自然と盆栽』1970年4月（創刊号）pp. 68-69, 1971年1月（10号）pp. 91-94）。
- 2 雑誌『盆栽』を発行した小林憲雄は、「盆栽」の説明で「盆栽とは自然美を表現するもの。鉢植は植物美を鑑賞するもの。」（『自然と盆栽』1971年1月（10号）、p. 92）とする。小林の啓蒙活動以前、「盆栽」と「鉢植え」の区別がなく、混同される状態が続いていた。当時の著作物からも混同する表記を確認できると指摘する（pp. 91-94）。
- 3 「新中間層」は、「自営農家や中小商工業者などの旧中間層に対して、資本主義の発達に伴って増加した専門・管理・販売などの業務に従事するホワイトカラー層のこと」（『デジタル大辞泉』（小学館））。新旧中間層はそのどちらも含む。
- 4 1970年創刊の盆栽雑誌に村田圭司を編集長とした『盆栽世界』（樹石社）があり、2021年現在、出版元を変えながら同タイトルで発行を続けている。
- 5 盆栽を愛好した皇族・貴族・政治家・実業家の多くは、皇籍離脱（1947（昭和22）年10月）・公職追放（1946（昭和21）年1月、～サンフランシスコ講和条約の発効に伴って1951（昭和26）年11月までに全員解除）・財閥解体（1945（昭和20）年～1952（昭和27）年）により盆栽を維持管理する状況になかった。このことも新中間層による盆栽趣味の広がりの一因となった。
- 6 皇室の盆栽は規模が大きく度々注目されている。皇居の大道と道灌壕の間に大道盆栽仕立場と呼ばれた7,600平方メートルの敷地があり、盆栽の冬季保管用の室（ムロ）、作業室などがある。設置は明治宮殿と同じ1887（明治20）年頃で、国賓・公賓を迎える際の盆栽を管理し、飾りとして利用している。盆器や水盤は大型のものが多く、2,000点以上あるとされ、明治期の工芸品が多い。また政治家の例では、「国風盆栽展」を企画する「日本盆栽協会」の場合、戦後の政権を担った吉田茂が1965（昭和40）年2月に社団法人化して初代会長に就任している（昭和42年10月迄）。2代目岸信介（昭和43年1月～同62年8月）、3代目福田赳夫（昭和63年5月～平成7年7月）、4代目原文兵衛（平成8年8月～同11年9月）、5代目藤尾正行（平成12年5月～同17年11月）、6代目宮沢喜一（平成17年11月～同19年6月）、7代目河野洋平（平成19年10月～同29年6月）、8代目下村博文（平成30年6月～令和3年8月現在）、であり、政治家の参加が継続する。皇族・政治家・実業家と盆栽のかかわりは多くの資料に掲載されているが、特に依田徹（2014）『盆栽の誕生』大修館書店、第4章「近代の盆栽愛好家たち」に盆栽が流行する明治期の様子が詳しい。
- 7 『サザエさん』の連載は1946（昭和21）年4月22日「夕刊フクニチ」から1974（昭和49）年2月21日「朝日新聞」まで。
- 8 杉本佐七『趣味の小もの盆栽 百人百樹』光芸出版（1967）に書かれた文章に安部仁「小もの盆栽入門」があり、「盆栽をやってる」／「はあ、金持だな」／これは、明治、大正、昭和と金持に縁の深かった、大きい立派な盆栽の話である。／昔は自動車が特権階級のもので一般には親しめないものだった。が、今はこれも普及してきた。」（p. 103）と盆栽の小型化と普及について触れた記述がある。1970（昭和45）年前後の盆栽に関する資料には、盆栽趣味の広がりにも触れる記述が確認できる。
- 9 「（サザエさんをさがして）盆栽「壮年男性の趣味」、団塊で断絶」2021年1月9日（朝刊3頁）朝日新聞記事。「朝日新聞記事データベース聞蔵II」を検索（最終アクセス2021年8月1日）。
- 10 「54年になると「戦前に及ばぬ盆栽」の見出しで市民が盆栽を楽しむ様子が描かれ、その3年後には「庶民的な盆栽ばやり」という記事が出た。65（同40）年の「お中元商戦をかせぐ盆栽」は、東京・池袋のデパートで「お中元商品の8割までを占めて大当たり」と伝える。盆栽はいつも日常的な存在だった」として、

- 「50代半ばの波平が盆栽に親しむ姿を作者の長谷川町子さんが繰り返し描いたのは、波平の趣味というより、当時の壮年男性のありふれた姿だったからだろう」とまとめる（畑川剛毅）（2021年1月9日（朝刊3頁）朝日新聞記事）。
- 11 2021年1月9日朝日新聞記事、さいたま市大宮盆栽美術館学芸員の田口文哉による指摘として、80年代前半までは壮年男性の趣味として盆栽があったが、戦後生まれのライフスタイルが大きく変化し、コア層を除き新規参入が一気に減った、とする。同美術館では「平成28年度秋季特別展 明治の盆栽事情——昭和のお父さんの背景」等の企画展示も開催された。
 - 12 公益社団法人全日本小品盆栽協会 関東支部「秋雅展」<https://shugaten.com/index.html>「盆栽の基本Q & A」「小品盆栽」って何ですか？（最終アクセス2021年8月27日）
 - 13 1976年、桑原武夫を初代会長として、京都法然院に創立。鶴見俊輔、多田道太郎（第二代会長）、橋本峰雄らが参加し、「ひろく現代（明治以降）風俗に関する理論的、歴史的研究」を目的にした研究会として続いている。現在は社団法人になっており、年報『現代風俗』を1977年から発行する。池井望は発足時に寄稿している。
 - 14 池井は『盆栽の社会学 日本文化の構造』を著作した経緯として、「現代風俗研究会」法然院での報告「自然と風俗—盆栽私見」（1977年4月6日）があり、研究会の席上、鶴見俊輔、多田道太郎、橋本峰雄の諸氏を始めとする先輩、同僚の方々から有益な指摘を受けたこと、仲村祥一との研究会で衣装と盆栽の社会学を担当することになったことを述べている。
 - 15 池井（1978b: 14）の記述で、仲村祥一編『現代娯楽の構造』文和書房（1973）第4章「釣魚論—時間と娯楽」の「2.「待ち」の遊びとしての釣り」の一節（仲村1973: 112）を引いて「仲村氏の説明は、盆栽の中の一つの性質にもそのまま当てはまる」とする。
 - 16 フェノロサが「美術真説」で文人画を批判した時期は一般に文人画の流行期であり、文人盆栽の発生に影響を与えている。戦後の趣味そのものの流行期に、盆栽がホビー化することと同じ現象を確認できる。
 - 17 池井（1978b: 141）「II 具体的課題としての「盆栽」2 盆栽の歴史にかえて 続・盆栽本史」より。
 - 18 中村（1968: 196-197）の記述によると、明治初期に東本願寺で3千鉢の小盆栽を作っていたとされ、徳川時代で名高いのは紀州の殿様であり、九州佐賀の鍋島公が庭の窯で小鉢を焼かせ、戦災で焼失したものの、今日も残っているとする。
 - 19 杉本（1967）の執筆者には『自然と盆栽』で長く連載を持つことになった明官俊彦がおり、「小鉢の収集」とする文章を寄せた。明官もこの後、小品盆栽に関する活動の中心メンバーになる。
 - 20 中村是好の盆栽に関する著書は『豆盆栽愛好』徳間書店（1962）、『小品盆栽』鶴書房（1968）、『小もの盆栽：手軽に作れて楽しめる』主婦の友社（1969）、『趣味の豆盆栽』高橋書店（1972）、『小物盆栽』主婦の友社（1973）、『小物盆栽：特徴を生かす木作り』主婦の友社（1980）の6冊がある。
 - 21 参加者は小林憲雄、横川、高島、東、雷園の主人根本、杉本佐七、中村是好の10人程度。中村（1968: 190）
 - 22 中村（1962: 96）「盆栽の好きな連中が私の家に集まって、盆栽の話や世話話などをしよう」と、会費200円で1961（昭和36）年4月2日、1962（昭和37）年2月7日に開催した。
 - 23 中村（1962: 134）、杉本夫人の言葉に「うちは寿園で名です」とある。
 - 24 中村（1962: 134-135）、会費200円、参加者は60～70名。「中村粹好園」は杉本の提案で名付けている。
 - 25 1962（昭和37）年に「東京アマチュア小品盆栽会」として発足し、1969（昭和44）年に「日本小品盆栽会」、1977（昭和52）年に「日本小品盆栽協会」と改め、全国へ活動を広げた。日本小品盆栽協会『小品盆栽』第9号（1977: 37）には、類似の団体名のあることを懸念したとする変更理由が書かれている。2021年現在、活動を継続する。日本小品盆栽協会東京支部「<https://shohinbonsai.tokyo/>」（最終アクセス2021年8月28日）『余暇の盆栽』（江口1964）には「東京アマチュア小品盆栽会」の月例会の画像が掲載され、発足1年で200人以上の会員と紹介される。また江口は、1960（昭和35）年7月に中村是好宅を訪ねた。

- 26 中村 (1968: 180)「松平さんの小盆栽をみて、私は自然に対し、また人間に対し、まったく目が開かれた」として、「国風盆栽会へも昭和十五、六年ごろから出品しています」と述べる。同じ頁には、盆栽は縁日で値切って購入し、下町の物干し台で仕立てたとする。地域としては浅草・本所・深川、小物・豆盆栽は庭のない下町方面で発祥したようなものと話す。また中村 (1962: 96) には、「盆栽展は、上野の美術館で開かれる国風盆栽展と、三越で開かれる名品盆栽展などがありますが、盆栽展に豆盆栽を出品する人は少なく、松平さんと杉本さんに私くらい」としている。
- 27 筆者が誌面を確認した盆栽雑誌に『盆栽界』『盆栽月報』があるが、戦時下の状況を反映する論調となっている。
- 28 北村卓三『自然と盆栽』1970年5月(2号)、折り込み葉書の説明にある。
- 29 『自然と盆栽』1976年4月(61号)、p.164の「御挨拶」冒頭に、「早いものです。昭和33年3月3日創業の三友社は満十七年、昭和45年3月創刊の『自然と盆栽』は、満五年を迎えました」とある。
- 30 このあと本社は、第82号で新宿区西新宿、第86号で練馬区南田中、第140号で豊島区南大塚へ移転。
- 31 1969年12月12日、ストックホルムでのノーベル文学賞受賞記念講演の全文は、川端康成(1969)に掲載されており、北村の引用した一節はp.26に確認できる。
- 32 推薦人は『自然と盆栽』の創刊号～第81号迄、全ての号に各44名～47名の氏名が掲載されている。川端康成は1972年4月(25号)頃に亡くなっているが、創刊号～第81号迄の全てで確認ができる。氏名の別に推薦文が掲載される号もあり、第6号～第14号にかけて、有吉佐和子・小林憲雄・石坂洋次郎・司馬遼太郎・角田喜久雄・松本清張・中西悟堂・檀一雄・円地文子・伊藤桂一らの「発刊の推薦文より」が掲載されている。
- 33 『自然と盆栽』1970年4月(創刊号)、小林憲雄(是空)「専門誌五〇〇号連刊 五十年の研鑽」(p.68)
- 34 小林憲雄は1972年12月12日に83歳で亡くなる。『自然と盆栽』1973年2月(35号)には、北村卓三「盆栽会の師父 小林憲雄(是空)氏が逝く」との追悼が掲載されている。
- 35 国風盆栽展で小品盆栽を展示した松平頼寿は、1944(昭和19)年に亡くなるが、妻の松平昭子は夫の残した盆栽を受け継ぎ、杉本(1967)には「杉・ニレケヤキの寄せ植え」を掲載し、思い出を語っている。また国風盆栽展への出品も続けた。
- 36 記録の残る第49回～57回の国風盆栽展の小品席数を確認すると、1975(昭和50)年は入選182席中6席、1976(昭和51)年は177席中7席、1977(昭和52)年は207席中9席、1978(昭和53)年は195席中11席、1979(昭和54)年は205席中11席、1980(昭和55)年は204席中15席、1981(昭和56)年は207席中18席(その他に中品3)である。『自然と盆栽』の発行を終えた1982(昭和57)年は206席中15席(その他に中品7)、そして1983(昭和58)年は210席中16席である。昭和50年代に全体の入選席数も増加するが、それ以上に小品盆栽の入選数は増加している。
- 37 北村は前掲の朝日新聞インタビューで、中国に渡った時代、議員の時代、出版社の時代があることを答えている。
- 38 明官小品盆栽研究所は、当時相模湖湖畔にあった盆栽研究所で、『自然と盆栽』で連載を長期にわたり執筆した明官俊彦が設置した。自然と盆栽別冊(1981)に広告が掲載されている。

参考文献一覧

1. 中村是好『豆盆栽愛好』徳間書店(1962)
2. 江口正直『余暇の盆栽』徳間書店(1964)
3. 杉本佐七編『趣味の小もの盆栽 百人百樹』光芸出版(1967)
4. 中村是好『小品盆栽』鶴書房(1968)
5. 川端康成『美しい日本の私—その序説』講談社現代新書(1969)

6. 『自然と盆栽』創刊号～第150号, 三友社 (1970～1982)
7. 『盆栽世界』創刊号, 樹石社 (1970)
8. 仲村祥一編『現代娯楽の構造』文和書房 (1973)
9. 岩佐亮二『盆栽文化史』八坂書房 (1976)
10. 池井望「流行研究の方法—古典理論を出発点にして—」現代風俗研究会『現代風俗'78』第2号 (1978a)
11. 池井望『盆栽の社会学 日本文化の構造』世界思想社 (1978b)
12. 自然と盆栽別冊『松柏盆栽の樹形作り実例集』三友社 (1981)
13. 依田徹『盆栽の誕生』大修館書店 (2014)
14. 早川陽「昭和初期の盆栽趣味の諸相—『趣味大観』(1935)にみられる自然栽培趣味の記述から—」昭和女子大学『学苑』964号 (2020)

付 記

「近代初期日本における美術・文化愛好者の再生産過程—学校外での教習活動に着目して—」

This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number JP19K00139.

本研究は JSPS 科研費 JP19K00139 の助成を受けたものです。

付録 「三友社の出版物」

No.	著 者	発行年	タイトル	出版社	備 考
1	菅野邦生	1973	『遊び方・作り方 草木と遊ぶ』	三友社	グリーンングブックス
2	井口樹生	1973	『植物故事 風の木 水の花』	三友社	グリーンングブックス
3	明官俊彦	1973	『樹種別小品盆栽の育て方 I』	三友社	グリーンングブックス
4		1974	『樹種別小品盆栽の育て方 II』		
5		1974	『樹種別小品盆栽の育て方 III』		
6	阿部倉吉	1975	『図解盆栽樹形の作り方 五葉松盆栽の整姿・整形』	三友社	グリーンングブックス
7	忍田博三郎	1976	『盆栽小鉢の面白味 日本の小鉢と陶工』	三友社	
8	北村卓三	1976	『盆栽樹種別 整枝培養一覧表 収録樹種 45 種』	三友社	
9	西口親雄	1976	『森林と人間—自然と共存するために—』	三友社	
10	月刊「自然と盆栽」編集部	1979	『図解 盆栽樹のふやし方と育て方』	三友社	自然と盆栽別冊
11	月刊「自然と盆栽」編集部	1979	『盆栽の育て方・作り方 花・実物編 (海棠・ズミ・リング)』	三友社	シリーズ盆栽の育て方・作り方
12		1979	『盆栽の育て方・作り方 葉物編 (檜・檜檜・檜箭檜・榎)』		
13		1979	『盆栽の育て方・作り方 松柏編 (黒松・錦松)』		
14		1980	『盆栽の育て方・作り方 葉・実物編 (ソロ)』		
15		1980	『盆栽の育て方・作り方 実物編 (ウメモドキ・小性梅)』		
16		1980	『盆栽の育て方・作り方 花物編 (ウメ)』		
17	月刊「自然と盆栽」編集部	1981	『松柏盆栽の樹形作り実例集』	三友社	自然と盆栽別冊
18	月刊「自然と盆栽」編集部 (高柳良夫)	1981	『樹種別年間盆栽培養ガイド』	三友社	
19	太田萬里	1982	『太田萬里の山野草—楽しみ方・育て方』	三友社	
20	日本小品盆栽協会監修	1982	『小品盆栽 100』	三友社	第149号, 第150号に広告の掲載。発行未確認。

(はやかわ よう 初等教育学科准教授・近代文化研究所所員研究員)